

研究レポート3

小学生の努力主義の形成要因と帰結

— 「頑張ればできる」 勉強観の功罪 —

明星大学 教育学部 助教

須藤 康介

1. 問題設定

本稿の目的は、小学生の努力主義、すなわち「頑張ればできる」という勉強観に着目し、その形成要因と帰結を明らかにすることである。

日本の教育界では、勉強に対して「頑張ればできる」と考える努力主義が強いと言われている。このことは荻谷(1995)が指摘していることであり、学力が先天的な能力や出身階層などの属性に基づくものではなく、努力によって決まるものであると捉えられているという。学校の教師がテストを返却するとき、高得点者に対して「よく頑張ったな」と言って答案を渡すという場面は、多くの人々にとって見覚えのあるものだろう。実際にはその子どもはそれほど頑張っておらず、もともと知能が高かったため、あるいは勉強に親和的な家庭環境で育ったために、高得点を取ただけかもしれない。しかし、それらの可能性の中で、最終的に強調されるのが努力であるところに、教育界の努力主義を垣間見ることができる。

Hopper(1981)の加熱・冷却論を援用すれば、このような努力主義は、日本において子どもを勉強に動機づける「加熱」の機能

を果たしてきたと言えるだろう。学校は、努力すれば報われると子どもに思わせることで、勉強に励み立身出世を目指すという「野心」を「加熱」してきた。しかし、志水(2010)によれば、近年学校で「努力」という言葉が発せられることが減少しているという。世相としても、阿部(2008)、橘木(2010)などの論著によって、本人の努力に還元されない「生まれ」による不平等の存在が、人々に認識されつつある。

では、近年の小学生に努力主義はどれほど浸透しているのだろうか。また、努力主義はどのように形成され、子どもたちにどのような帰結をもたらしているのだろうか。努力主義は子どもたちを勉強に動機づけるという「功」の側面のほかに、低学力者に自己責任を押しつけるというような「罪」の側面も併せ持つのではなかろうか。本稿では、努力主義の実態を確認した後に、その形成要因および功罪の帰結を実証的に検討する。

なお、中学生ではなく小学生を分析対象とするのは、子どもに努力主義が形成される原初期に着目したいがためである。中学生に関する分析結果は、補論で述べる。

2. 努力主義の実態

本稿では、「誰でも努力すれば勉強が得意になれる」という質問項目に対する回答を、努力主義の強さを表す変数として使用する。まず、現在の小学生に努力主義がどれほど浸透しているのかを、度数分布で確認しよう。

表1より、小学生の76.5%までが「誰でも努力すれば勉強が得意になれる」と考えていることが分かる。「誰でも」というのは極めて強い表現であるので、多くの児童が強い努力主義を有していることが窺える。なお、以下の分析では、度数が少なかった「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」

を統合し、「そう思わない」とする。

では、努力主義への支持は、出身階層によって異なるのだろうか。荻谷（2012）などの議論に基づけば、階層上位の児童は家庭における経済資本や文化資本に恵まれ、相対的に努力が報われやすい（学習の障壁が少ない）者と位置づけられる。一方、階層下位の児童は、家庭の経済的・文化的制約によって、勉強に関する支援を得られる機会が相対的に少ないなど、努力がなかなか成果につながらない現実に直面している可能性がある。以上のことから、階層上位の児童ほど努力主義をより支持しているということがあり得る。そこで、両親学歴・世帯年収と努力主義の関連を分析する。

表1 努力主義の度数分布

	有効パーセント	度数
とてもそう思う	40.5%	1390
まあそう思う	36.0%	1237
あまりそう思わない	18.3%	629
まったくそう思わない	5.2%	180

注) 努力主義：「誰でも努力すれば勉強が得意になれる」の項目を用いている。「無回答・不明」を除外して分析。

表2 父学歴と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
父学歴	中学・高校卒	38.9%	37.4%	23.7%	100.0%	(1076)
	短大・専学卒	42.0%	32.3%	25.7%	100.0%	(529)
	大学・大学院卒	40.9%	36.6%	22.4%	100.0%	(1715)
合計		40.5%	36.2%	23.4%	100.0%	(3320)
カイ二乗検定		p=0.232				

表3 母学歴と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
母学歴	中学・高校卒	40.0%	36.2%	23.8%	100.0%	(905)
	短大・専学卒	41.4%	34.9%	23.7%	100.0%	(1622)
	大学・大学院卒	39.5%	38.1%	22.4%	100.0%	(856)
合計		40.5%	36.1%	23.4%	100.0%	(3383)
カイ二乗検定		p=0.620				

表4 世帯年収と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
世帯年収	500万円未満	38.7%	35.9%	25.4%	100.0%	(1008)
	500～800万円	42.7%	35.5%	21.8%	100.0%	(1353)
	800万円以上	39.3%	37.2%	23.5%	100.0%	(941)
合計		40.5%	36.1%	23.4%	100.0%	(3302)
カイ二乗検定		p=0.168				

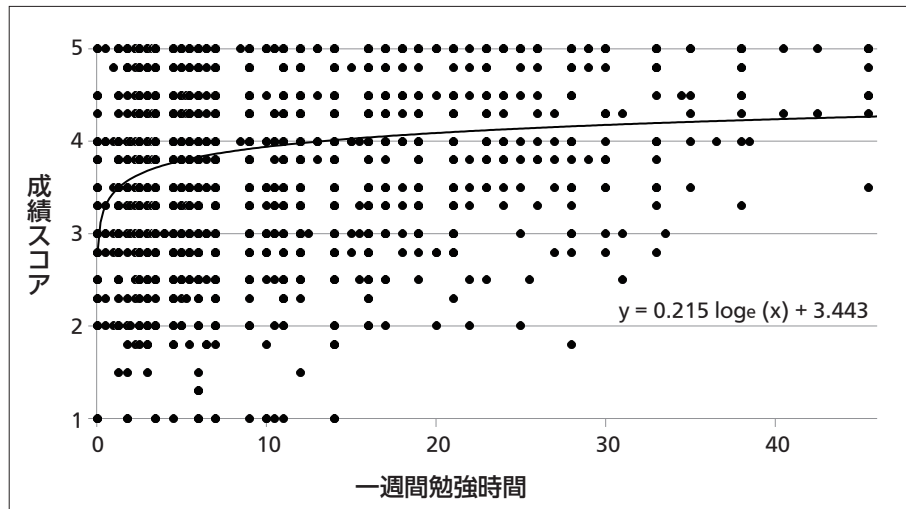
表2～4より、予想に反して、階層にかかわらず、努力主義は多くの児童に普遍的に浸透していることが分かる。つまり、努力が報われやすい環境にいるかどうかによらず、多くの小学生は素朴に努力主義を支持している。結果は省略するが、性別による差も見出されない。

なぜ、小学生はこれほどまで普遍的に、努力主義を支持しているのだろうか。まず考えられるのは、「努力主義が真実であるから」という理由である。小学校段階の勉強であれば、努力すればできるようになるというのは概ね真実であり、その真実によって努力主義が支持されているという考え方である。そこで、努力主義の命題が実際に成立しているか

どうかを検証してみよう。具体的には、一週間勉強時間（今の学年になってからの平均時間）を独立変数、成績スコアを従属変数とする回帰分析を行う。

なお、成績は公立小学校と国立・私立小学校では厳密には比較できないと考え、本分析のみ対象者を公立小学校の児童に限定した。また、直線推計では当てはまりが悪かったため、一週間勉強時間の0時間を0.05時間に置換し、自然対数を用いた曲線推計を行った。成績スコアは、保護者が回答した国語・社会・算数・理科の成績5段階（上の方・真ん中より上・真ん中くらい・真ん中より下・下の方）の平均値を用いた⁽¹⁾。

図1 一週間勉強時間と成績スコアの関係



有効度数 3,242 決定係数 0.059

図1の結果が示すように、努力主義の命題はごく限定的にしか正しくない。確かに、勉強時間が長い（努力している）児童ほど成績が高い傾向があるが、決定係数は0.059であり、勉強時間は成績スコアの分散の5.9%しか説明できない。測定誤差を考慮して、成績スコアの予測値と実測値の差が0.5未満の者を「予測的中」とみなしても、的中率は38.3%であり、勉強時間によって成績を説明できている児童は、およそ3人中1人しか存在しない。言い換えれば、3人中2人は「勉強しているわりには成績が低い」あるいは「勉強していないわりには成績が高い」状態にあるということである。

以上の分析から、努力主義は実際にはごく限定的にしか正しくなく、にもかかわらず、多くの児童に深く浸透している、一種の神話、ないしはイデオロギーであることが分かる。それでは、子どもたちはどのような経路で努力主義の勉強観を獲得したのだろうか。努力主義の是非をめぐる価値判断を行う前に、まずはその形成要因を分析しよう。

3. 努力主義の形成要因

小学生が努力主義を支持するにあたって、教育雑誌を読んで知ったとか、自身で哲学的

に考えて達したとかということは、およそ考えられない。大きくは家庭の影響と学校の影響が想定される。また、通塾している場合は学習塾の影響もあるかもしれない。

まず、親子の努力主義の関連を分析する。本調査では、保護者にも子どもと同じワーディングで努力主義をたずねているため、親子の努力主義の関連を直接的に分析することができる。なお、変数の意味内容の統一のため、回答者が母親である場合に限定して分析を行う。

表5より、親子の努力主義の間には、明確な関連が見出される。やはり、努力主義は家庭における文化継承という側面が強い。ただし、母親では「とてもそう思う」17.8%、「まあそう思う」50.8%、「そう思わない」31.4%であるので、子どもは親以上に努力主義を支持している。つまり、子どもの努力主義は、家庭における文化継承+ α ということである。

次に、学校の影響を確かめるため、学校の授業と努力主義の関連を分析する。なお、各授業変数は「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ほとんどない」の4件法でたずねているが、クロス集計では、できるだけ度数が均等になるように2段階に割り当てている。

表5 親努力主義と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
親努力主義	とてもそう思う	52.9%	29.8%	17.3%	100.0%	(567)
	まあそう思う	41.4%	37.2%	21.4%	100.0%	(1619)
	そう思わない	33.2%	36.3%	30.4%	100.0%	(999)
合計		40.9%	35.6%	23.5%	100.0%	(3185)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6① ドリルやプリントを使う授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
ドリルやプリント を使う授業	よくある	42.7%	36.1%	21.3%	100.0%	(2027)
	それ以外	37.3%	35.8%	26.8%	100.0%	(1371)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3398)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6② 自分たちでテーマを決める授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
自分たちでテーマ を決める授業	ある	42.8%	37.2%	20.0%	100.0%	(1606)
	ない	38.5%	34.9%	26.7%	100.0%	(1776)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3382)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6③ 自分で考えたり調べたりする授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
自分で考えたり 調べたりする授業	よくある	50.6%	31.3%	18.2%	100.0%	(1157)
	それ以外	35.3%	38.5%	26.3%	100.0%	(2224)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3381)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6④ 集団で考えたり調べたりする授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
集団で考えたり 調べたりする授業	よくある	46.4%	34.3%	19.3%	100.0%	(1547)
	それ以外	35.5%	37.5%	27.0%	100.0%	(1844)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3391)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6⑤ 人に話を聞きに行く授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
人に話を聞きに 行く授業	ある	43.6%	36.3%	20.1%	100.0%	(1501)
	ない	38.0%	35.7%	26.3%	100.0%	(1887)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3388)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6⑥ 調べたことを紙面にまとめる授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
調べたことを紙面 にまとめる授業	よくある	46.5%	32.7%	20.8%	100.0%	(1824)
	それ以外	33.6%	39.7%	26.7%	100.0%	(1567)
合計		40.5%	35.9%	23.5%	100.0%	(3391)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6①～表6⑩から、興味深い知見が得られる。それは、ほぼすべての授業変数が、努力主義と統計的に有意な関連を有しており、努力主義を高めるのに少しずつ寄与しているということである。推察するに、ドリルを解こうが、調査をしようが、試験を受けようが、発表をしようが、活動の内容・形式にかかわらず、その過程やフィードバックにおいて、教師から「もっと頑張れば、もっとよいものができたね」というメッセージが発せられるのではなかろうか。これが「隠れたカ

リキュラム」として、児童に努力主義を浸透させていると考えられる。

傍証として、統計的に有意な関連が見られなかった授業変数は、パソコンを使った授業と外部の人が来て教えてくれる授業の二つのみである。パソコンはそのままの意味で「非人間的」に、努力では克服困難な適性や生育環境（情報機器に慣れ親しんできたか）というものの存在を児童に伝えており、教師による努力主義のメッセージを打ち消している可能性がある。外部人材の授業については、そ

表6⑦ 自分の考えや意見を発表する授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
自分の考えや意見を発表する授業	よくある	46.5%	33.1%	20.4%	100.0%	(2033)
	それ以外	31.4%	40.5%	28.2%	100.0%	(1346)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3379)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6⑧ 確認テストや小テストをする授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
確認テストや小テストをする授業	よくある	44.0%	34.2%	21.8%	100.0%	(2069)
	それ以外	34.8%	39.2%	26.0%	100.0%	(1307)
合計		40.4%	36.1%	23.5%	100.0%	(3376)
カイ二乗検定		p=0.000				

表6⑨ パソコンを使った授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
パソコンを使った授業	ある	40.4%	36.4%	23.1%	100.0%	(2161)
	ない	40.6%	35.4%	24.1%	100.0%	(1233)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3394)
カイ二乗検定		p=0.760				

表6⑩ 外部の人が来て教えてくれる授業と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
外部の人が来て教えてくれる授業	ある	41.8%	35.6%	22.6%	100.0%	(2013)
	ない	38.6%	36.4%	25.1%	100.0%	(1359)
合計		40.5%	35.9%	23.6%	100.0%	(3372)
カイ二乗検定		p=0.110				

もそも授業者が学校の教師ではない。これらのことから、努力主義は「学校の教師」の教育実践の中に特異的に内包されていると推察できる。

では、日本における「影の教育」とも言われる、学習塾の影響はどうだろうか。以下、学習塾の利用が努力主義とどのように関連しているかを示す。なお、進学塾と補習塾は厳密には区分できないと判断し、両者を統合して「学習塾」とした。

表7より、学習塾と努力主義の間には関

連が見出されない。結果は省略するが、プリント教材教室（公文式など）と努力主義の関連についても同様である。つまり、「日本の教育界には努力主義が根付いている」という記述は、「日本の学校には努力主義が根付いている」という記述に改めたほうが厳密である。学校の教師は、意図的・無意図的に、児童に努力主義を伝達するエージェントとしての役割を担っていると考えられる。本研究で国際比較はできないが、日本の学校文化の特質を捉えているのではなかろうか。

表7 学習塾と努力主義の関係

		努力主義			合計	有効度数
		とてもそう思う	まあそう思う	そう思わない		
学習塾	通っている	41.1%	35.9%	23.0%	100.0%	(825)
	通っていない	40.3%	36.0%	23.7%	100.0%	(2611)
合計		40.5%	36.0%	23.5%	100.0%	(3436)
カイ二乗検定		p=0.889				

4. 努力主義の帰結（功罪）

これまでの分析で、努力主義は実体としてはほとんど成立していないにもかかわらず、小学生に普遍的に浸透していること、その形成には家庭における文化継承に加えて学校教育が寄与していることが明らかになった。この状況を、現実とは異なるイデオロギーを子どもたちに伝達していると捉えて、その欺瞞を批判することは可能ではある。しかし、努力は決して無駄にはならない、学習には動機づけが必要だという視点に立てば、努力主義を安易に否定することも適切ではないだろう。

本節で、努力主義が児童の勉強時間や成績、および自己認識や社会意識に与える影響を分析し、その功罪について考察を進めたい。ま

ず、一週間勉強時間と成績スコアそれぞれを従属変数とする重回帰分析を行った結果を示す。月齢は2014年2月調査時点で、誕生日から何ヶ月が経っているかを表す。つまり10月生まれであれば、月齢「4ヶ月」である。きょうだい数で「4人以上」は4.5人、世帯年収で「2,000万円以上」は2,250万円とした。これらの影響を統制することで、努力主義が勉強時間や成績に与える正味の効果に接近する。

表8の分析から、努力主義は勉強時間を延ばし、ひいては成績を高めることに寄与していることが示唆される。努力が報われると思うからこそ頑張れる、ということだろう。第2節で分析したように、実際には努力は必ずしも学力につながるとは限らないが、学力につながると信じることで学習意欲が高まり、結果的に学力が高まりやすくなるという、

よい意味での潜在的機能が生じていると考えられる。

しかし、努力主義の「功」の側面ばかりを強調するのも、楽観的に過ぎるだろう。「頑張ればできる」という命題が真であるとすれば、その対偶である「できないのは頑張っていないからだ」も真ということになる。「できないのは頑張っていないからだ」という発想は、もともと勉強が苦手な子ども、家庭背景などで困難を抱えている子どもに、「努力が足りない」という的外れな自己責任を押し付けることになりかねない。本来であれば、教育的・社会的支援が必要な子どもに対して、「もっと頑張れ」の一言で済ますのは、適切とは思えない。

この点を確かめるため、努力主義が子どもの自己認識に与える影響を分析してみよう。以下のクロス集計では、成績スコア 3.75～5.00 を「上位」、1.00～3.50 を「中下位」とする⁽²⁾。

表 9 と表 10 の分析から、努力主義「そう

思わない」群では、成績と「何をやってもうまくいかない」「勉強が計画通りに進まない」に明確な関連がないのに対して、努力主義「とてもそう思う」「まあそう思う」群では、成績下位になるほど「何をやってもうまくいかない」「勉強が計画通りに進まない」と感じることが読み取れる。努力主義を支持しているということは、「頑張ればできるはず」と考えているということである。しかし、実際には成績下位に留まってしまう者が一定数生じる。「頑張ればできるはず」と「自分ではできない」が並立するとき、その子どもは自身に対して「うまくいかない」「計画通りに進まない」という自己否定感や焦燥感を抱いてしまうと考えられる。小学生のうちから自己否定感を抱いてしまうことが、心身の発達にとって望ましくないことは言うまでもない。

それでは、自己認識ではなく、より広い社会意識に対して、努力主義はどのような影響を与えているのだろうか。以下、分析結果を示す。

表8 一週間勉強時間と成績スコアの規定要因（重回帰分析）

	一週間勉強時間			成績スコア		
	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率	回帰係数	標準化回帰係数	有意確率
女子ダミー	0.921	0.061	***	0.037	0.022	
月齢	0.016	0.007		0.022	0.087	***
きょうだい数	-0.464	-0.048	**	-0.054	-0.049	**
父学歴（教育年数）	0.237	0.066	***	0.042	0.103	***
母学歴（教育年数）	0.312	0.064	***	0.080	0.145	***
世帯年収（100万円単位）	0.201	0.091	***	0.026	0.105	***
母専業主婦ダミー	0.472	0.029		0.018	0.010	
通塾ダミー	6.950	0.390	***	0.015	0.007	
努力主義：とてもそう思うダミー	2.103	0.136	***	0.283	0.161	***
努力主義：まあそう思うダミー	0.879	0.056	**	0.184	0.102	***
努力主義：そう思わない<基準> (定数)	-2.358			1.735		***
決定係数	0.241			0.103		
回帰のF検定	p=0.000			p=0.000		
有効度数	3088			3153		

(*** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05)

表9 努力主義ごとの成績と「何をやってもうまくいかない」の関係

努力主義			何をやってもうまくいかない		合計	有効度数
			あてはまる	あてはまらない		
とても思う	成績	上位	27.4%	72.6%	100.0%	(860)
		中下位	40.5%	59.5%	100.0%	(513)
	合計		32.3%	67.7%	100.0%	(1373)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.000			
まあ思う	成績	上位	26.0%	74.0%	100.0%	(718)
		中下位	40.0%	60.0%	100.0%	(502)
	合計		31.8%	68.2%	100.0%	(1220)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.000			
そう思わない	成績	上位	35.7%	64.3%	100.0%	(406)
		中下位	41.4%	58.6%	100.0%	(394)
	合計		38.5%	61.5%	100.0%	(800)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.116			

表10 努力主義ごとの成績と「勉強が計画通りに進まない」の関係

努力主義			勉強が計画通りに進まない		合計	有効度数
			あてはまる	あてはまらない		
とても思う	成績	上位	21.9%	78.1%	100.0%	(863)
		中下位	33.8%	66.2%	100.0%	(517)
	合計		26.4%	73.6%	100.0%	(1380)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.000			
まあ思う	成績	上位	21.5%	78.5%	100.0%	(720)
		中下位	32.8%	67.2%	100.0%	(509)
	合計		26.2%	73.8%	100.0%	(1229)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.000			
そう思わない	成績	上位	31.0%	69.0%	100.0%	(410)
		中下位	33.3%	66.7%	100.0%	(396)
	合計		32.1%	67.9%	100.0%	(806)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.521			

表11 努力主義ごとの成績と「勉強ができる人が高い給与もらうべき」の関係

努力主義			勉強ができる人が高い給与もらうべき		合計	有効度数
			あてはまる	あてはまらない		
とても思う	成績	上位	37.4%	62.6%	100.0%	(863)
		中下位	39.5%	60.5%	100.0%	(516)
	合計		38.2%	61.8%	100.0%	(1379)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.470			
まあ思う	成績	上位	27.3%	72.7%	100.0%	(717)
		中下位	31.8%	68.2%	100.0%	(507)
	合計		29.2%	70.8%	100.0%	(1224)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.107			
そう思わない	成績	上位	25.6%	74.4%	100.0%	(410)
		中下位	19.0%	81.0%	100.0%	(394)
	合計		22.4%	77.6%	100.0%	(804)
	カイ二乗検定 (連続修正)		p=0.031			

表11が示すように、努力主義「そう思わない」群では、成績が下位になるほど、学力を給与に反映させることに反対する。自身が不利になるような社会制度には反対するのが合理的であるので、この回答傾向は納得できるものである。しかし、努力主義「とてもそう思う」「まあそう思う」群では、成績上位層と中下位層で、学力を給与に反映させることに反対する程度がほとんど変わらない。つまり、努力主義は、低学力者が不利な就業状態に陥ることを低学力者自身が肯定するような作用を及ぼしている。

このような努力主義の機能は、見方によって「功」とも「罪」とも取れる。低学力者に低い給与を与えることを納得させ、社会秩序を安定化させていると捉えれば、「功」と言える。不平等の「正当化」に成功しているとも表現できるだろう。一方、「できないのは頑張っていないからだ」という（偽りの）大義名分によって、低学力者から不利な就業状態に異議を申し立てる心性を喪失させていると捉えれば、「罪」と言える。

5. まとめと結論

本研究で得られた知見は主に三点である。第一に、努力主義は実体としてはほとんど成立していないイデオロギーであるにもかかわらず、階層や性別によらず、多くの小学生に普遍的に浸透している。第二に、努力主義の形成には家庭における文化継承に加えて、学校の教師による全授業を通じた働きかけが寄与している。第三に、努力主義は児童の勉強時間を延ばし、成績を高める側面もあるが、成績下位の児童に自己否定感や焦燥感を与える側面、不利な就業状態に異議を申し立てるという思考回路を閉ざしている側面もある。

このような努力主義の功罪をふまえたとき、努力主義を無条件に肯定することも批判することも難しい。まずは、その実態と機能を正しく理解することが重要であろう。試論として提言を述べれば、教師や保護者は、実際にはほぼ幻想である努力主義を学習への動機づけに上手く「活用」しつつも、低学力者に「努力不足」という（多くの場合不当な）レッテルを貼ることなく、学習方略の助言などの具体的教育支援を行うことが求められるのではなかろうか。教師は児童に放課後や休日まで付き添っているわけではないため、児童がどれくらい「頑張っているか」を正確に知ることは難しい。そのため、えてして、結果から「逆算」してその児童が頑張っているかどうかを判断する（たとえば、テストの得点が悪かったことで、この子は頑張っていないのだろうと推断する）という事態が生じる。この「逆算」に過誤の可能性があることには注意が必要だろう。

また、児童に対して「努力は決して無駄ではないが、どれほど報われるかは適性や環境に基づく個人差がある」といった折衷的かつ現実的な働きかけをすることで、低学力者が自己否定感や焦燥感を抱えてしまうことや、不安定な将来を必要以上に甘受してしまうことを回避させることも重要かもしれない。今後、教師や保護者のどのような働きかけが、努力主義の「功」の側面を大きくし、「罪」の側面を小さくするのかを分析することが求められる。

<注>

- (1) 一週間勉強時間は、平日勉強時間×5+休日勉強時間×2で算出した。なお、勉強時間が「6時間以上」という回答は6.5時間として扱った。
- (2) 本来であれば、成績スコア2.50～3.50の「中位」と1.00～2.25の「下位」を区分すべきところで

あるが、本データでは成績を下位側に回答した者が少なかったため、統計的検定の都合上、「中下位」として統合した。

〈参考文献〉

- E.Hopper 1981 *Social Mobility: A Study of Social Control and Insatiability* Basil Blackwell.
- 阿部彩 2008『子どもの貧困・日本の不公平を考える』岩波新書
- 荻谷剛彦 1995『大衆教育社会のゆくえ・学歴主義と平等神話の戦後史』中公新書
- 荻谷剛彦 2012『学力と階層』朝日文庫
- 志水宏吉 2010『学校にできること - 一人称の教育社会学』角川選書
- 橋木俊詔 2010『日本の教育格差』岩波新書

〈補論〉

小学生と同様の分析を中学生に対して行ったところ、得られた主な知見は以下であった。第一に、努力主義を支持する割合は小学生より減少するが、62.8%と多数派である。第二に、小学生と同様、一週間勉強時間と成績スコアの関連は、決定係数0.055、的中率32.4%と極めて小さい。第三に、親学歴と努力主義に関連が見出されないことは小学生と同様であったが、世帯年収が高い生徒ほど、努力主義を支持するという結果が生じた。経済階層下位の生徒が、努力の限界に気づき始めると考えられる。第四に、努力主義が学校のほぼ全授業を通して形成されているという点は、小学生と同様であった。努力主義は小・中学校を貫く、日本の学校文化と言えらる。第五に、努力主義が、低学力者に「勉強が計画通り進まない」という焦燥感をもたらすこと、「勉強ができる人が高い給与をもらうべき」という自己非合理を肯定させることは、小学生と同様であった。ただし、「何をやってもうまくいかない」という自己否定感、努力主義にかかわらず、低学力者ほど感じるという結果であった。中学生の努力主義に関する詳細な考察は、別の機会としたい。